

学習指導力の育成に資する「初等教育実習指導」の授業の在り方

ー シラバスの段階的な構成と模擬授業の実践を通してー

明星大学教育学部教育学科 特任教授 相 原 雄 三

How “Guidance for Student Teaching at Primary Level” contributes to the development of teaching skills

～ Through step-by-step syllabi and practicing trial lessons ～

Yuzo AIHARA

抄録

現在、全国の公立学校教員採用選考試験における採用倍率の低下傾向が続いており、採用される教員の質の低下について危惧されている。このような現状のなか、教員養成学部・学科をもつ大学においては、教員を目指す学生に対して、教員として求められる資質・能力をいかに育成していくかという課題に対して、教育課程カリキュラムとそれに基づく授業の不断の充実・改善が求められる。そこで、本稿では、本学における4年次の「教育実習」の事前指導として位置付けられている3年次後期の「初等教育実習指導」の授業の在り方について提言する。まず、教員として求められる資質・能力のうち「学習指導力」の育成に焦点を当て、その育成に資する模擬授業の取組の課題を明らかにする。次に、その課題を解決するために、「学習指導力」の育成に資するシラバスの段階的な構成を提案し、それに基づく授業実践における学生の学びの姿を分析して、その有効性を考察する。最後に、今後の「初等教育実習指導」の授業の在り方についての知見を述べる。

キーワード：教員養成、初等教育実習指導、学習指導力、シラバスの段階的な構成、模擬授業

1. 問題の所在と研究の目的

現在、全国の公立学校教員採用選考試験における採用倍率の低下傾向が続いている。特に、小学校では、平成12(2000)年度採用の採用倍率は12.5倍だったのに対して、令和4(2022)年度採用の採用倍率は2.5倍で過去最低となっている。¹⁾ 本学の学生が最も多く受験する東京都における小学校教員の採用倍率を見ても、平成29(2017)年度採用の採用倍率が3.0倍だったのに対して、令和4(2022)年度の採用倍率は2.4倍となっている。²⁾ 採用倍率の低下傾向について、中央教育審議会答申では、「定年退職者数や特別支援学級・通級による指導を受ける児童生徒数の増加等に伴う採用者数の増加や民間企業の採用状況等の様々な要因が複合的に関連していると考えられる。」³⁾ と言及している。このことに加えて、2021年度から2025年度までに順次進められる小学校の35人学級導入や2022年度からの教科担任制の本格的な導入も加わることで、必要な教員数はさらに膨らむことが予想され、今後も受験者の増加が見込めなければ採用倍率の低下傾向に拍車がかかることが懸念される。

こうした、採用倍率の低下傾向が見られる中で、課題として指摘されるのが「教員の質の低下」である。財務省「歳出改革部会資料」⁴⁾ には、日本経済新聞(令和元年8月27日)に掲載された早稲田大学田中博之教授の「学校現場では、受験倍率が3倍を切ると優秀な教員の割合が一気に低くなり、2倍を切ると教員全体の質に問題が出てくるといわれている」⁵⁾ という見解を引用し、「教員定数の増は採用倍率の更なる低

下を招き、教員の質の低下が懸念される。」と示されている。

このような現状を鑑みると、教員養成学部・学科をもつ大学においては、教員として求められる資質・能力をいかに育成していくかといった、教員資格の付与に当たる教育課程カリキュラム（以下、「教員養成カリキュラム」という。）の不断の充実・改善への努力が求められることは言うまでもない。なぜならば、教員の採用・配置は、民間企業就職者とは異なり、教員免許の取得が前提となっており、教員免許の取得時点で、教員として求められる資質・能力が一定程度身に付いているということが証明されているという判断の下に行われているからである。

しかしながら、教員養成カリキュラムにおいて重要な位置付けとなる「教育実習」に関する先行研究を概観すると、例えば、米沢（2008）は、「教員養成カリキュラムにおける教育実習の重要性を指摘している研究や、教育実習及び体験的授業科目における教職意識と教師との力量の変容に焦点を当てた研究が行われてきた」⁶⁾と指摘しており、教育実習の事前指導に焦点を当てて、教師の指導力の向上に資するシラバスの在り方について言及している研究は管見の限り見当たらない。また、五十嵐・宮内（2019）は、ラポール形成を図りながら「教育実習」を迎えられるよう、実習校を訪問して児童との関係形成や研究授業の学習指導案の素案作成や模擬授業を行うといった事前指導に取り組んだが、「事前指導を通して教師効力感の一つである『教授・指導効力感』及び『学級管理・運営効力感』が高まらなかった」⁷⁾とし、「実習生が事前に授業実践力の向上を実感でき、自信を持って教育実習に臨むことが出来る機会を確保することが必要となるだろう」⁸⁾と課題を指摘しているものの、授業実践力の向上に資するシラバスや模擬授業の在り方などについては言及していない。

これらのことを踏まえ、本研究の目的を次のとおりとする。まず、教員養成段階で育成が求められる教員としての資質・能力を明らかにした上で、本学の4年次の「教育実習」の事前指導として位置付けられている3年次後期の「初等教育実習指導」の授業についてのシラバスの在り方について提言をする。次に、そのシラバスに基づいて、筆者が担当した2021年度後期の「初等教育実習指導」の授業実践における学生の学びの姿を分析して、その有効性について考察する。さらに、それらを踏まえて、今後の「初等教育実習指導」の授業の在り方についての知見を述べる。

なお、本研究の対象とした、2021年度後期の「初等教育実習指導」を受講した学生からは、授業で作成したリアクションペーパーや意識調査等の内容を活用・分析することの了承を得ていることを付記しておく。

2. 教員養成段階における教員に求められる資質・能力の育成に関わる実践上の課題

(1) 教員養成段階における学習指導力の育成

教員に求められる資質・能力については、2015年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」において、「教員が備えるべき資質能力については、例えば使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力等がこれまでの答申等においても繰り返し提言されてきたところである。これら教員として不易の資質能力は引き続き教員に求められる。」⁹⁾と述べられている。

ここで例示されている資質・能力のうち、教育の専門家として常に確かな力量を発揮することが求められるものとして実践的指導力があげられる。その中でも、予測困難な社会を生きる子供たちに確かな学力を身に付けさせるためには、教員の学習指導力の向上が求められることは言うまでもない。また、この学習指導力は、確かな教材研究、児童理解、日常の学級経営はもとより、教員としての使命感や教育的愛情、豊かな人間性などの資質・能力を基盤として、それらに支えられているものであることから、教員に求められる資質・能力の中核に据えられるものであると考える。

では、児童や保護者の視点から教員に求める資質・能力とはどのようなものなのだろうか。ベネッセ教育研究所が実施した「教員のイメージに関する子どもの意識調査」（平成26年12月実施－調査対象は小学

6年生の児童)¹⁰⁾の結果では、「尊敬している先生とは、どのような先生ですか」という設問に対する最も多い回答の割合は、「授業がわかりやすい(81.5%)」であった。また、日本PTA全国協議会が実施した「教育に関する保護者の意識調査」(平成28年9月実施－調査対象は小学5年生の保護者)¹¹⁾の結果では、「子どもにどのような力を身につけさせたいですか」という質問に対する最も多い回答の割合は、「自ら考える力(90.4%)」であった。また、「子どもの学力向上のために学校に求めたいことは何ですか」という質問に対する最も多い回答の割合は、「学ぶ楽しさが実感できる授業の工夫(54.7%)」であった。この調査結果からも、教員に求める資質・能力として学習指導力の重要性を捉えることができる。

このことを踏まえ、教員養成段階において求められる学習指導力について、東京都教育委員会が策定した「東京都公立学校の校長・副校長及び教員としての資質の向上に関する指標」(平成29年7月)¹²⁾(以下、「指標」という。)に基づいて考えてみたい。

この指標は、教員の成長段階を、教諭(基礎形成期・伸長期)－主任教諭(充実期)－指導教諭・主幹教諭といった職層によるキャリアステージで設定し、すべての教員に共通する項目として、教員が身に付ける力と教育課題に関する対応力の二つに大別している。教員が身に付ける力は、①学習指導力、②生活指導力・進路指導力、③外部との連携・折衝力、④学校運営力・組織貢献力の4つの項目に整理されている。教諭(1年目～8年目)の職層段階での学習指導力に関する指標は、(表1)のとおりである。

(表1) 東京都公立学校の校長・副校長及び教員としての資質の向上に関する指標(抜粋)

成長段階	教諭	
	基礎形成期	伸長期
	1～3年目	4年目～
学習指導力	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領の趣旨を踏まえ、ねらいに迫るための指導計画の作成及び学習指導を行うことができる。 ・児童・生徒の興味・関心を引き出し、個に応じた指導ができる。 ・主体的な学習を促すことができる。 ・学習状況を適切に評価し、授業を進めることができる。 ・授業を振り返り、改善できる。 	

この指標に示されている内容は、教員が授業を行うために必要な学習指導力であると言える。しかし、現実的にどれだけの大学新卒者の教員が、この指標に示された内容に関して「実践できる」といった力を身に付けて教員になっているだろうか。わずか数週間の「教育実習」を体験しただけで、すべての内容を実践できるレベルにまで身に付けられている者はほとんどいないと言っても過言ではないだろう。そこで、教員養成段階では、この指標の基礎形成期につながるように、教員を目指す学生に対して、「授業をする際に意識しなければならないこと」として強く認識できるように学びを深化させていくことが重要である。つまり、「教科及び教科指導法に関する科目」や「初等教育実習指導」などの授業レベルで考えるならば、シラバスの内容をより実践的なものにして、学修者である学生が学校現場での授業実践を意識して自分ごととして学べるように工夫するなど、学校現場での授業実践とのつながりが見えるようにシラバスの充実・改善を図っていくことが求められる。

(2) 教員養成段階における模擬授業の意義と本学の取組の課題

2006年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方」¹³⁾では、いつの時代にも求められる教員の資質・能力として実践的指導力の育成が強く指摘され、その授業方法の一つとして模擬授業を取り入れることが適当とされた。その答申以降、教員養成課程のある大学では、教員としての資質・能力の最終的な形成と確認に資する「教職実践演習」が必修化された。さらに、2017年の文部科学省「教育課程

コアカリキュラムのあり方に関する検討会」の「教育課程コアカリキュラム」¹⁴⁾でも、模擬授業の取組が明示されたことで、その取組は一層重視されるようになったと考える。そのような背景により、本学においても「教科及び教科指導法に関する科目」や「初等教育実習指導」等の授業において模擬授業が取り入れられている。

日高(2019)は、「模擬授業は、実践的指導力育成のための指導において、教科の専門的知識の理解、技能の習得はもちろんのこと、その基本的・基礎的な知識理解を授業に実践的に活用させる指導である。指導の技能を習得するとともに、適切に対応できる支援の場面やその方法を身に付けることができる実践的取組である。模擬授業の実践と学生相互の協議・考察を通し、実際の授業運営のポイントについて理解を深めてゆくものである。」¹⁵⁾と模擬授業の意義を述べている。

筆者も、この日高の見解を踏まえて、「初等教育実習指導」の授業に模擬授業を位置付けることにした。(表2)は、2021年度後期の「初等教育実習指導」を受講した学生(14名)が、模擬授業の授業者をこれまでどの程度経験してきたかを調査した結果を示したものである。

(表2) 2021年度「初等教育実習指導」受講学生の模擬授業における授業者の実施経験

番号	学生(コース)	模擬授業での授業者の経験の有無と実施教科		授業者として留意したこと
		2年次 (前・後期)	3年次 (前期)	
1	A(小学校教員)	有 家庭	有 音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・発問や指示を簡潔にすること。 ・児童の発言に対して反応・言葉がけをすること。 ・導入で興味をもたせること。 ・授業を計画するときに一貫性をもたせること。
2	B(小学校教員)	無	有 社会	<ul style="list-style-type: none"> ・話すときの声を大きくすること。 ・関心をもって授業を受けられるようにすること。
3	C(小学校教員)	有 算数、理科、 生活	有 音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の反応を見ながら授業をすること。 ・導入で興味をもたせること。 ・教材を工夫すること。
4	D(小学校教員)	無	有 音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・話すときの声を大きくすること。 ・話し方をわかりやすくすること。
5	E(小学校教員)	無	有 音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・大きく、はっきりした声で話すこと。 ・しゃべりすぎないこと。
6	F(小学校教員)	有 算数、生活	有 理科	<ul style="list-style-type: none"> ・発問や声掛けを工夫すること ・必要な活動を想定して、時間配分をすること。
7	G(英語)	無	無	
8	H(英語)	無	無	
9	I(保健体育)	有 保健体育	無	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に考えることができ学習活動を取り入れること。 ・授業内で生徒から出る質問を想定すること。
10	J(保健体育)	有 保健体育	有 保健体育	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が分かるようにゆっくり話すこと。 ・グラフ等を用いて興味・関心を引き出すこと。
11	K(保健体育)	有 保健体育	有 保健体育	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が伝えたいことをはっきり話すこと。 ・説明する際に、簡潔でわかりやすく伝えること。 ・生徒の興味を引き出すようにすること。
12	L(保健体育)	有 保健体育	有 体育理論	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が楽しくなるような授業にすること。 ・生徒の発言を引き出す発問をすること。
13	M(特別支援)	有 肢体不自由 の心理等	有 音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・雰囲気や声量、表情など、教師の立ち振る舞いを適切にすること。 ・児童に寄り添う姿勢を見せること。 ・児童の実態を踏まえた課題を設定すること。
14	N(特別支援)	有 算数	無	<ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとゆっくりと声を出すこと。 ・分かりやすく伝えること。 ・時間内に終わること。

この調査結果から、本学における教員養成段階での学習指導力の育成に資する模擬授業の取組についての課題を述べる。第一の課題は、2年次から3年次前期にかけて、模擬授業の授業者を経験した回数の平均は一人当たり約1.6回であり、全く経験していない者も一定数いることから、学習指導力に関わる実践的な力を身に付ける経験を十分にしているとは言い難いことである。また、専攻するコースによっては模擬授業を行う校種・教科に偏りが生じる傾向があるということである。これらに関連して、「初等教育実習指導」の第1回の授業の際に、例えば、(表2)において最も多く模擬授業の経験をしている学生Cは、「これまで模擬授業を行う機会が少なく、授業に関しては一番不安を感じている」と述べている。また、保健体育コースの学生Jは、「この二年半の間、保健体育のことしか学んでこなかったので、小学校で全科を担当するのが不安である」と述べている。

なお、参考までに、2022年度後期の「初等教育実習指導」を受講する学生(18名)を対象に調査したところ、2年次から3年次前期にかけて模擬授業の授業者を経験した回数の平均は一人当たり約1.7回であり、全く経験したことのない学生は2名であった。

第二の課題は、これまで授業者として経験した模擬授業では、概ね「話し方や声の大きさ」「発問や指示を簡潔にすること」「説明をわかりやすくすること」などに留意して模擬授業に取り組む傾向が見られ、第2節(1)の(表1)で示した学習指導力の指標についての認識は具体的には育成されているとは言い難いことである。

このような課題を踏まえると、4年次の「教育実習」の事前指導に当たる3年次後期の「初等教育実習指導」では、受講する学生全員が模擬授業の授業者を経験することを通して、学習指導力の指標として示されている内容について「授業をする際に意識しなければならないこと」として認識できるようにシラバスの充実・改善を図り、授業実践していく必要があると考える。

以上のような考えに基づき、第3節では、2021年度後期に筆者が担当した「初等教育実習指導」における学習指導力の育成に資するシラバス構成と授業の実践について述べる。

3. 学習指導力の育成に資する「初等教育実習指導」のシラバスの構成と授業の実践

(1) 授業のねらい

本授業のシラバスに示された学生の「行動目標・到達目標」は、次のとおりである。

- 教育実習の意義を理解し、自己の課題を明らかに^{ママ}なる。
- 教材研究の在り方や学習指導案(日案・週案)の作成を通して教育現場での実践が展開できるようになる。
- めあてを意識した教育実践が可能となる。
- 指導案などの各種文書の作成においても、適切な表記や表現ができるようになる。

この「行動目標・到達目標」のうち、特に「初等教育実習指導」の授業のねらいとして重視したのは、「めあてを意識した教育実践が可能となる。」という項目である。その理由は、本時の「めあて」を意識した授業を展開できるようになることは、児童が「見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」¹⁶⁾といった主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に資するために必要な教員の学習指導力と合致するからである。また、第2節(1)の(表1)で示した学習指導力の指標の一つである「学習指導要領の趣旨を踏まえ、ねらいに迫るための指導計画の作成及び学習指導を行うことができる。」ということにもつながるものであるからである。

(2) シラバスの段階的な構成

上記の授業のねらいを踏まえ、受講する学生が模擬授業の授業者を経験することを通して、「本時の『めあて』を意識した学習指導を行うこと」の重要性を認識できるようにすることを実践的な課題とし、その解決のために、次のような意図をもってシラバスを段階的に構成した。

- ①教員に求められる資質・能力として、児童や保護者は、「わかりやすい授業」や「学ぶ楽しさを実感できる授業」ができることを期待していることを捉えさせるようにする。
- ②実際に学校現場で行われている学習指導案とその授業動画を教材として用いて、授業者である学級担任が本時の「めあて」を明確に設定して、どのように学習指導を展開しているのか分析・考察させるようにする。その際、事前課題として、教科書教材を用いて本時の指導展開案を各自に作成させ、学級担任が作成した実際の学習指導案や授業動画を考察する視点をもたせるようにする。
- ③模擬授業は、受講する学生全員が授業者となって行うようにする。
- ④模擬授業後には、全員でその授業の省察を行うとともに、学習指導において特に意識すべきことはどのようなことなのか振り返り、自分の考えをまとめるようにする。

このような意図を具体化して作成したのが、(表3)の2021年度後期の「初等教育実習指導」のシラバスである。

(表3) 2021年度後期の「初等教育実習指導」のシラバス

第 1 回	教育実習の目的と意義－自己の課題を明らかにする－
第 2 回	教員に求められる資質・能力－子供、保護者、都民が求めているものとは－
*〔事前課題〕	算数・第4学年 単元「分数をくわしく調べよう」の第8時の指導展開案の作成
第 3 回	算数／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方① －本時の板書計画案の作成－
第 4 回	算数／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方② －本時の板書計画案の検討－
第 5 回	算数／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方③ －本時の指導展開の実際と教師の指導の考察－
第 6 回	算数／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方④ －本時の児童の学習状況の見取りと教師の指導の考察－
*〔事前課題〕	国語・第4学年 単元「気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう」 ／教材名「ごんぎつね」の第7時の指導展開案の作成
第 7 回	国語／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方① －本時の指導展開案の考察－
第 8 回	国語／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方② －本時の指導展開の実際と教師の指導の考察－
第 9 回	社会／1単位時間の授業展開と教師の学習指導の在り方 －本時の指導展開の実際と教師の指導の考察－
第 10 回	模擬授業において授業者として留意することの明確化
第 11 回	模擬授業①
第 12 回	模擬授業②
第 13 回	模擬授業③
第 14 回	模擬授業④
第 15 回	模擬授業⑤／授業をする際に留意すべきことのまとめ

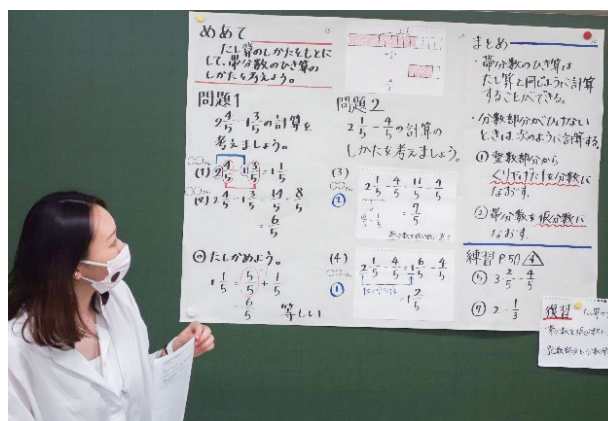
(3) 授業実践の概要

第1回は、4年次で行う「教育実習」の目的と意義について講義をし、それを踏まえた上で、「教育実習」に向けての自己の課題を明らかにさせた。(表4)は、受講生14名が記述した自己の課題の内容から筆者が読み取って整理したものである。

(表4) 「教育実習」に向けての自己の課題の記述

自己の課題の内容	記述した人数
児童が分かる、楽しい授業ができるようになること。	10名
児童との適切な接し方やコミュニケーションができるようになること。	8名
自分の目指す教師像や授業観を明確にすること。	7名
教師に求められる能力や考え方、感性を深めること。	2名
教育に対する視野を広げること。	1名
教育実習に必要な基礎的な知識を学ぶこと。	1名
他校種の教員免許を取得するための学びを生かすこと。	1名

第2回は、教員に求められる資質・能力について、まず、学生自身の考えを明らかにした上で、児童や保護者はどのように考えているのか各種の調査結果を基に考察させた。この調査結果から、児童や保護者が教師に求めているは、「わかりやすい授業ができる」「興味・関心を引き出す授業ができる」など、学習指導に関する資質・能力であることをつかませた。こうして、「初等教育実習指導」の授業では、教員に求められる学習指導力を身に付けていくことを主題に据えて学びを深めていくことを改めて確認した。



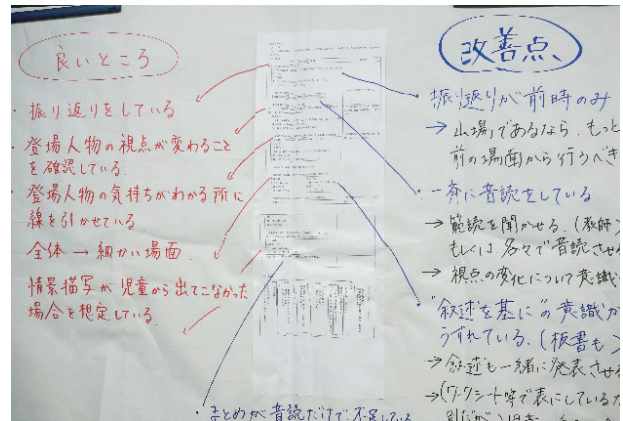
(図1) 算数/第8時(本時)の板書計画

第3回から第6回は、算数の1単位時間の授業をどのように展開していくのか、また、教師はどのようなことに留意して指導するのかということについて、実際の学習指導案や授業動画を教材として用いて考察させた。教材として扱ったのは、第4学年の単元「分数をくわしく調べよう」の第8時の授業である。事前課題として、第8時で学習する「帯分数－帯分数の計算の仕方」について、教科書をもとにして指導展開案を作成させることで、学生全員が本時の学習指導についてイメージをもてるようにした。

具体的には、第3回では、全員で本時の「めあて」を確認した後で、グループごとに第8時の板書計画を模造紙に作成させた。第4回では、(図1)のように、作成した板書計画を基にして本時の授業展開について説明させた後で、導入部分についてのみどのように進めていくのか、模擬的に教師となって演じさせた。また、グループごとに作成した板書計画のよい点や改善点について検討させた。第5回では、実際に学校現場の教師が作成した本時の指導展開案と授業動画を用いて教師の指導の在り方について考察させた。その際、着目させたのは、まず、本時の「めあて」の設定に導くまでに、教師がどのように児童に発問したり、児童の反応を生かしたりして授業を展開しているかということである。その次に、設定した本時の「めあて」に迫るようにするために、学習活動をどのように展開しているかということである。第6回では、本時における児童の学習状況の見取り方と児童の反応を生かした授業の進め方について考察させた。

第7回から第8回は、国語の1単位時間の授業をどのように展開していくのか、また、教師はどのようなことに留意して指導していくのかについて、実際の学習指導案や授業動画を教材として用いて考察させた。教材として扱ったのは、第4学年の単元「気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう」／教材名「ごんぎつね」の第7時の授業である。事前課題として、第7時で学習する「第6場面」の内容について、教科書をもとにして、本時の指導展開案を作成させ、学生全員に本時の学習指導についてイメージをもてるようにした。

具体的には、第7回では、実際に学校現場の教師が作成した本時の指導展開案について、「よい点・妥当点」と「課題点・改善点」をグループごとに全員で考察した内容を(図2)のように模造紙に整理させた。第8回では、実際に学校現場の教師が作成した本時の指導展開案と授業動画を用いて教師の指導の在り方について考察させた。その際、着目させたのは、本時の「めあて」に迫るように学習活動が展開できているか、また、そのことを意識して教師は発問や児童の発言やつぶやきなどの価値付けが適切にできているかということである。



(図2) 国語／本時の指導展開案の考察・整理

第9回は、本時の「めあて」に迫るようにするために教師の「発問」や「指示」が明確に行われている例として、社会の1単位時間の授業動画を視聴して、教師の指導の在り方について考察・協議をさせた。

第10回は、本時を展開する上で必要な教師の指導の在り方について話し合った後で、模擬授業に取り組むに当たって意識すべきことについて自分の考えをまとめさせた。

第11回から第15回は、模擬授業を行った。模擬授業の取り組み方は次のとおりである。

- ①模擬授業で行う教科と単元を授業者自身で決め、学習指導案を作成する。学習指導案は、模擬授業時に印刷して全員に配布する。
- ②授業者は、自らの模擬授業における学習指導の取組についての「授業評価」の視点をあらかじめ設定して事前に全員に周知する。
- ③模擬授業の時間は概ね15分間とし、1単位時間の指導過程である「導入－展開－終末」の一連の流れに沿って圧縮して行うようにする。また、授業者以外の学生は、全員児童役として授業に参加する。
- ④模擬授業後は、授業者は授業についての自評を行い、児童役とした参加した学生と短時間の省察・協議を行う。その後、児童役として参加した学生は、「授業評価」の視点に基づいて、評定尺度法で評価するとともに、コメントシートに授業感想等を記入する。また、これらの「評価」に関する内容は、授業者にフィードバックする。

さらに、第15回の最終回の授業では、全員の模擬授業が終了したことを踏まえて、「授業を行う際に特に留意すべきこと」について意識調査を行うとともに、学んだことをワークシートにまとめさせた。

4. 授業実践の分析・考察

本章では、学習指導力の育成に資するためにシラバスを段階的に構成して模擬授業を行ったことで、「めあてを意識した教育実践が可能となる。」という「初等教育実習指導」の授業のねらいに迫ることができたのか学生の学びの姿を基に分析・考察する。

(1) リアクションペーパーの記述に見る学生の学びの姿の分析

学生の学びの姿については、抽出学生E（小学校教員コース／3年次前期に模擬授業の授業者の経験あり）と抽出学生L（保健体育コース／2年次と3年次前期に授業者の経験あり）が授業後に取り組んだリアクションペーパーの記述から、分析するのに必要な箇所を筆者が抽出した。

①抽出学生Eの学びの姿の実際

◇第1回〔教育実習に向けた自己の課題の明確化〕

- ・私は、今までにインターンシップや教育現場に行った経験がなく、ボランティア等で経験を積んできた学生たちと比べて劣る部分が多くあると思う。教育実習を行うまでの準備として、少しでも教職に対する考え方、指導力や対話力を身に付けたい。

◇第2回〔教員に求められる資質・能力の考察〕

- ・私は、常に笑顔で子供たちを迎えることができることを根底に、子供一人一人のよいところをさらに引き出せる教師になりたい。そのために、子供に対する言葉がけや、子供の主体性を大切にしたい授業を展開していきたいと考えた。

◇第5回〔算数／（授業の動画視聴）本時の指導展開の実際と教師の指導の考察〕

- ・授業動画を視聴して、本時の「めあて」は、必ず教師が最初に提示してから始めるのではないことがわかった。視聴した動画の先生は、「めあて」を設定するまでの流れがスムーズで、児童は頭の中を整理しながら取り組んでいると思った。私も、授業展開の仕方について工夫したい。

◇第6回〔算数／本時の児童の学習状況の見取りと教師の指導の考察〕

- ・計算の仕方についての考え方を児童に発表させるときには、どの考え方が児童の理解を深められるか、新しい気づきができるのか、ということを見極めて取り上げていく必要があると感じた。そのためにも、まずは、教師が子供の考え方を理解してあげることが大切である。

◇第7回〔国語／実際に現場の教師が作成した指導展開案の考察〕

- ・単元の目標を踏まえた上で、本時の「めあて」を考え、授業の展開の中のどこで提示するのかということを慎重に行っていかなければ、子供たちの学習の方向性が変わってしまうと思った。指導展開案を作成するときは、本時の「めあて」を明確に設定し、どのような学習活動を行えば児童の理解につながるのか考えていきたい。

◇第8回〔国語／（授業の動画視聴）本時の指導展開の実際と教師の指導の考察〕

- ・国語の授業の動画を視聴して本時の「めあて」が機能していないと感じた。本時の「めあて」の提示の仕方や提示する前後の学習活動を工夫することが大切だと思った。また、学習活動同士のつながりがあると、児童の本時の「めあて」への意識や集中力が薄れることが少ないのではないかと考えた。その一方で、教師が児童一人一人を受け止めながら授業をつくっていく点はとても参考になった。

◇第9回〔社会／（授業の動画視聴）本時の指導展開の実際と教師の指導の考察〕

- ・今回の社会の授業動画からは、改めて、本時の「めあて」が明確であっても、授業の構成内容によっては、その「めあて」が機能するかどうかが変わってくると感じた。今回の動画の先生は、本時の「めあて」につながる発問と、それに対する児童の発言の拾い方がとても上手だったので参考にしたい。また、児童への指示の的確さや板書の仕方、時間の使い方も参考になった。

◇第10回〔模擬授業に向けて留意することの明確化〕

- 模擬授業では、笑顔でいること、指示は的確に出すこと、大きくはっきりした声で話すこと、そして、今までの講義で学んだ本時の「めあて」の出し方の工夫、板書の工夫などに留意して取り組みたい。

◇第11回〔友達の模擬授業から学んだこと〕

- 本時の「めあて」を提示したら、児童全員で読むことで意識付けさせているところがとてもよいと思った。ぜひ真似をしたい。また、発問に対する児童の反応の予測ができるようになれば、「あー、こうきたか」「だから、こうしよう」と対応できるようになる。身に付けるスキルとして新たな発見があった。

◇第12回〔友達の模擬授業から学んだこと〕

- 本時の「めあて」と「まとめ」がつながっているところがよかった。本時の「めあて」が、最後の「まとめ」までつながっていると児童は分かりやすいと思うので、取り入れていきたい。

◇第14回〔模擬授業の実践と自己の振り返り〕

【模擬授業の「授業評価」の視点】

- ①明るく、楽しく、元気に授業をすることができているか。
- ②児童に、本時の「めあて」を意識させることができたか。

【自己の振り返り】

- 自分の授業は、平板すぎてしまった。もっと児童の考えを引き出せるようにしなければならないと思った。グループワークをしている児童たちへの声掛けも考えていればよかった。今までの講義で学んだことを、あまり生かせていなかった。

◇第15回〔模擬授業を通して学んだことのまとめ〕

- 本時の「めあて」の重要性を改めて考えた。授業を展開する上で、本時の「めあて」をいつ提示するのか、そして、それに対してどのように児童の意識を向けるのか、ということを工夫することで学習活動は大きく変わってくると思った。これまでは、授業をいかにスムーズに進めるのかということばかり意識していた。でもそれは教師の都合で、児童が主役となれるような授業をしていく必要があると考えた。

②抽出学生Lの学びの姿の実際

◇第1回〔教育実習に向けた自己の課題〕

- 子供たちのために自分ができることは何か、今の自分には何が必要かを見つけていけるようにしたい。授業を行う際にも、子供たちの「わかる」「楽しい」を引き出していけるような工夫ができるようになりたい。模擬授業を通して、授業の考え方や話し方を学んでいきたい。

◇第2回〔教員に求められる資質・能力の考察〕

- 教員に求められる資質・能力について、「自分はこうしたい」という目線から考えたことはあったけれど、保護者の目線から考えたことはなかった。
- 私は、子供たちの手本となれる教員にならないといけないと感じた。まず、授業でしっかり勉強を教えられるようになること、そして、それはもちろんのこと思いやりや責任感が備わっているかということも資質・能力として大切であると考えた。

◇第5回〔算数／（授業の動画視聴）本時の指導展開の実際と教師の指導の考察〕

- 授業づくりをするときに、目標を実現するための授業の中心となる学習活動やその評価を大切にすることが確認できた。また、導入部分では、子供たちに「めあて」を提示するまでの流れを学ぶことができた。特に、本時の「めあて」は、子供たちが意識をもたないと学習する方向性がわからなくなってしまうので、スムーズに子供の意識がつながるようにしていきたい。

◇第6回〔算数／本時の児童の学習状況の見取りと教師の指導の考察〕

- 算数の計算の仕方を子供が説明するときには、単元の目標に沿って適切な言葉を使うように教師が指導する必要があると感じた。今回は、「繰り下げて計算する」という言葉を教師が使って計算方法を説明し、子供に式の意味を理解できるようにすることが大切であると考えた。

◇第7回〔国語／実際に現場の教師が作成した指導展開案の考察〕

- 本時の指導展開案において、本時の「めあて」をどの学習過程に位置付けるのかについて、教師がしっかりと意図をもって行うことが大切である。なぜならば、1単位時間の授業は、本時の「めあて」に沿って進められていくように構成していくことが重要であるからである。

◇第8回〔国語／（授業の動画視聴）本時の指導展開の実際と教師の指導の考察〕

- 今回の国語の学習指導案では、本時の「めあて」に対する学習活動の内容に少しばらつきがあり、分解してみると、一つ一つの学習活動の内容はよいものであるが、本時の「めあて」とのつながりがなかった。児童にどのような視点で学ばせたいのか、本時の「めあて」を明確にして、それに沿った授業展開をすることが大切である。

◇第9回〔社会／（授業の動画視聴）本時の指導展開の実際と教師の指導の考察〕

- 現場で行われている授業を視聴して、特に本時の「めあて」は意識することが大切だと何度も感じたので、自分が教育実習に行った際には、そのことを意識して、学習活動とのつながりを考え、教師の意図をしっかりとって授業をしたい。

◇第10回〔模擬授業に向けて留意することの明確化〕

- まず、授業展開については、今まで一番大切だと感じてきた本時の「めあて」の設定部分と、本時の「めあて」と学習活動とのつながりを意識したい。本時の「めあて」に沿って、どうすれば充実した学習にすることができるか、発問と予想される児童の発言も十分に考えていきたい。
- 板書は、資料や短冊の掲示、パワーポイントの活用も考えているが、実際の学校現場で行われている授業の動画で見た先生方の授業スタイルも参考にしながらわかりやすく提示していきたい。

◇第11回〔模擬授業の実践と自己の振り返り〕

【模擬授業の「授業評価」の視点】

- ①本時の「めあて」に迫る授業ができていたか。
- ②児童の考えを引き出し、発言ができるような発問をすることができていたか。

【自己の振り返り】

- 本時の「めあて」を提示したり、発問をしたりするタイミングが全く合わなかった。言葉に詰まるところも多くて思うように進められなかった。もっと勉強しないといけないと思った。具体的には、児童の発言を促すような発問ができるようにしたい。

◇第12回〔友達の模擬授業から学んだこと〕

- 今日、模擬授業をした3名とも、本時の「めあて」から「まとめ」までつながっていてよかった。特に、Aさんの授業は、児童の発言を多く引き出すことができている、考える活動にも取り組みやすかった。これは、導入の時点で何について意識して学習をしていくかという本時の「めあて」をはっきりさせていたことによるものだと実感した。自分も見習っていききたい。

◇第15回〔模擬授業を通して学んだことのまとめ〕

- 模擬授業に取り組むことで学んだことは、児童に対してどのようなことを学んでほしいのかという意図を明確にして授業をすることと、授業を考える上で、「めあて」を明確にするということである。実際の私の模擬授業は、どちらかという本時案に沿って授業を流していくという感じになってしまった。本時の「めあて」を提示したのはよいが、児童にそれを意識させたり、これを学んでほしいという意図を伝えたりすることはできなかったと思う。
- 友達の模擬授業に参加して学んだことの一つ目として、本時の導入の時点で、前時の振り返りをスムーズ且つ適切に行うようにすることで、本時の「めあて」が設定でき、その後の展開の内容にもつながりやすいと感じた。

上記の抽出学生Eと抽出学生Lのリアクションペーパーの記述から、次のような学びの姿を見取ることができる。

①本時の「めあて」の機能を捉えた学びの姿

抽出学生Eは、第7回の授業で、「単元の目標を踏まえた上で、本時の『めあて』を考え、授業の展開の中のどこで提示するのかということを慎重に行っていかなければ、子供たちの学習の方向性が変わってしまうと思った」と述べている。また、抽出学生Lは、第5回の授業で、「特に、本時の『めあて』について、子供たちが意識をもたないと学習する方向性がわからなくなってしまう」と述べている。

これらの記述から、授業者である教師が授業において、本時の「めあて」を設定することは、児童にどのような方向で学習を進めていくのかという見通しをもたせる機能があることを捉えていることがわかる。

②本時の「めあて」の設定の仕方を捉えた学びの姿

抽出学生Eは、第7回の授業で、「単元の目標を踏まえた上で、本時の『めあて』を考え(る)」と述べている。また、抽出学生Lは、第7回の授業で、「本時の指導展開案において、本時の『めあて』をどの学習過程に位置付けるのかについて、教師がしっかりと意図をもって行うことが大切である」と述べている。

これらの記述から、本時の「めあて」は、単元の目標の実現を目指して教師が意図的に設定する必要があることを捉えていることがわかる。

③本時の「めあて」を意識した授業構成の在り方を捉えた学びの姿

抽出学生Eは、第5回の授業で、「本時の『めあて』は、必ず教師が最初に提示してから始めるのではないことがわかった。視聴した動画の先生は、『めあて』を設定するまでの流れがスムーズで、児童は頭の中を整理しながら取り組んでいると思った」と述べている。また、第7回の授業では、「単元の目標を踏まえた上で、本時の『めあて』を考え、授業の展開の中のどこで提示するのかということを慎重に行っていかなければ、子供たちの学習の方向性が変わってしまうと思った」、第8回の授業では、「本時の『めあて』の提示の仕方や提示する前後の学習活動を工夫することが大切だと思った」と述べている。そして、第10回の授業では、模擬授業に向けて「本時の『めあて』の出し方の工夫、(中略)などに留意して取り組みたい」と述べている。

抽出学生Lは、第5回の授業で、「本時の『めあて』は、(中略)スムーズに子供の意識がつながるよ

うにしていきたい」と述べている。また、第7回の授業では、「1単位時間の授業は、本時の『めあて』に沿って進められていくように構成していくことが重要である」、第8回の授業では、「児童にどのような視点で学ばせたいのか、本時の『めあて』を明確にして、それに沿った授業展開をすることが大切である」と述べている。さらに、第10回の授業では、模擬授業に向けて「今まで一番大切だと感じてきた本時の『めあて』の設定部分と、本時の『めあて』と学習活動とのつながりを意識したい。本時の『めあて』に沿って、どうすれば充実した学習にすることができるか、発問と予想される児童の発言も十分に考えていきたい」と述べている。

これらの記述から、本時の学習指導において、導入段階では、本時の「めあて」に児童の意識がつながるように学習活動を設定し、展開段階では本時の「めあて」に沿って学習が展開していくように学習活動を設定するという授業構成の在り方を捉えていることがわかる。

(2) 意識調査の結果に見る学生の学びの姿の分析

第15回の授業では、授業のまとめとして、受講する学生に対して授業をする際に留意することについての意識調査を行った。この意識調査は、授業をする際に留意する必要があることとして設定した12の項目の中から、授業者として特に留意すべきこととして認識したことを4つ選択するというものである。また、同じ項目を使って、4年次前期の「教育実習」の終了後に、「教育実習」で授業を行う際に特に留意したことを回答する意識調査を行った。意識調査で設定した12の項目は、(表5)の通りである。なお、この項目の設定については、東京都教職員研修センターが開発した「授業力診断シート」¹⁷⁾を参考にした。また、意識調査の結果は、項目の選択の傾向を比較して見るため、3年次後期の「初等教育実習指導」を受講した14名の学生のうち、4年次前期に「教育実習」に取り組んだ12名のものを(表6)に掲載した。

(表5) 授業をする際に留意することについての意識調査の項目

1	本時の学習指導案の展開に沿って授業が流れるようにする。
2	本時の「めあて」を子供に明確に示して授業をする。
3	本時の「めあて」が実現するように授業をする。
4	本時の「めあて」を子供が意識できるような導入にする。
5	子供に対する「発問」や「指示」を明確にする。
6	子供の反応や発言を生かしながら授業をする。
7	子供が学習活動や学習内容がわかりやすいように説明をする
8	子供が主体的に授業に取り組むように工夫する。
9	資料や教材を工夫する。
10	効果的な板書をする。
11	子供がわかりやすいような話し方をする。
12	子供一人一人に気を配って授業をする。

(表6) 授業を行う際に特に留意すべきこと、留意したことについての意識調査の結果

	項 目	選択した人数	
		3年次後期／ 「初等教育実習指導」で、授業を行う際に特に留意すべきこととして認識したこと	4年次前期／ 「教育実習」で、授業を行う際に特に留意したこと
1	本時の学習指導案の展開に沿って授業が流れるようにする。	0名	0名
2	本時の「めあて」を子供に明確に示して授業をする。	4名	6名
3	本時の「めあて」が実現するように授業をする。	6名	3名
4	本時の「めあて」を子供が意識できるような導入にする。	5名	6名
5	子供に対する「発問」や「指示」を明確にする。	7名	5名
6	子供の反応や発言を生かしながら授業をする。	9名	11名
7	子供が学習活動や学習内容がわかりやすいように説明をする。	3名	2名
8	子供が主体的に授業に取り組むように工夫する。	10名	7名
9	資料や教材を工夫する。	1名	3名
10	効果的な板書をする。	1名	1名
11	子供がわかりやすいような話し方をする。	0名	2名
12	子供一人一人に気を配って授業をする。	2名	2名

この意識調査の結果を見ると、「2. 本時の『めあて』を子供に明確に示して授業をする。」「3. 本時の『めあて』が実現するように授業をする。」「4. 本時の『めあて』を子供が意識できるような導入にする。」という、本時の「めあて」に関する項目のいずれかについて、学生全員が「特に授業において意識すること」として回答している。また、3年次後期の「初等教育実習指導」の授業終了時に、「3. 本時の『めあて』が実現するように授業をする。」を選択した6名のうち3名は、4年次前期の「教育実習」の終了時の意識調査では、「2. 本時の『めあて』を子供に明確に示して授業をする。」(2名)や「4. 本時の『めあて』を子供が意識できるような導入にする。」(1名)を選択した。その理由を聞き取ると、「教育実習では、本時の『めあて』を実現するためには、授業において『めあて』を子供に意識させる教師の手だての大切さについて実感した。だから授業のたびに、そのことを意識して取り組んだ」「本時の『めあて』を子供に意識させることはなかなか容易でなかったから、特に意識して導入段階に取り組む必要があると考えながら授業を行った」という回答であった。さらに、「教育実習」の意識調査と併せて書いた振り返りレポートの中で、例えば、抽出学生Aや抽出学生Lは、「初等教育実習指導」で学んだことが「教育実習」の際にどのように役に立ったのかについて、(表7)のように記述している。

(表7) 抽出学生の振り返りレポートの記述内容

【抽出学生Aの記述(抜粋)】

3年次に他の授業で模擬授業に取り組む中で、自分に足りないと感じたのは、授業の流れを意識することだった。学習指導案を作成しているうちに授業の一場面を断片的に捉えてしまい、流れる授業を行うことにとても苦労した。しかし、3年次の「初等教育実習指導」の授業を通して、自分が行わせたい活動と本時の「めあて」を結び付けることで、この課題を解決することができた。

「教育実習」の授業づくりでは、はじめは同じように授業の一場面にとらわれてしまって、うまく授業を考えることができなかった。しかし、3年次の「初等教育実習指導」の授業で学んだ「自分が行わせたい活動と本時の『めあて』を結び付けること」に留意したり、はじめに板書計画を作成したりすることで、児童とのやり取りを踏まえた流れる授業が考えられるようになった。この二つのことを通して、「教育実習」での自分が担当した授業で、本時の「めあて」の実現に向けて、児童とのやり取りを楽しみながら授業することができた。

【抽出学生Lの記述(抜粋)】

実習校が「めあて」を提示することを全校で統一して徹底していた。だから、3年次後期の「初等教育実習指導」で、導入の部分で本時の「めあて」を大切にすることについて学習したことをそのまま生かした。本時の「めあて」をノートに書き、全員で読むことで子供たちへの意識付けをするとともに、見通しをもたせることができた。また、児童も「今日、何を学習するのか」ということが分かるので、家庭学習において自らのノートで復習する姿も見られた。

このことから、4年次前期に「教育実習」を行った学生全員が、その程度に違いはあるにしろ、授業をする際に特に留意することとして、「本時の『めあて』を意識した学習指導を行うこと」について認識しながら授業実践に取り組んだことがわかる。

また、4年次の12月に、4年次前期に「教育実習」を行った12名の受講生に対して、「本時の『めあて』を意識した学習指導を行うこと」を認識し始めた時期について質問紙調査を行った。これは、小学校に入学以降、大学での学びも含めて受講生は、教員の指導による「授業」を受けてきた経験が本論文でいう教員に必要な資質・能力の一つである「学習指導力」を身に付ける過程に与える影響について探るためである。12名の受講生の回答結果は、(表8)のとおりであり、回答内容の記述の一部を(表9)に掲載する。

(表8) 「学習指導力」を身に付ける過程において影響を与えた経験

「学習指導力」の獲得過程に影響があったと回答した経験	回答人数(複数回答)
初等教育実習指導での講義やそこでの模擬授業の経験	10名
教育実習での自らの授業経験やそこでの指導教官からの指導・助言	4名
教科教育法等の講義やそこでの学習指導案の作成の経験	3名

(表9) 抽出学生の質問紙調査の回答内容の記述

【抽出学生Lの記述(抜粋)】

私にとって、大学3年次の後期に学んだ「初等教育実習指導」での影響が一番大きい。授業では、本時の「めあて」を示すことを学び、そこから自然と自分が授業者として授業づくりをする際の中心として、本時の「めあて」を大切にして授業をつくるという意識が生まれた。今までの小・中・高の学校での授業を振り返って、自分が「めあて」を意識して授業を受けていた覚えはないが、教育実習で教員として授業をする経験のなかで、児童が本時の「めあて」に沿って学ぶ姿を見て、学習活動を具体化したり発問をしたりする上で「めあて」は軸になるものだと思えて感じた。

この調査結果から、教員に必要な資質・能力である「本時の『めあて』を意識した学習指導を行うこと」といった「学習指導力」を身に付ける過程において、大学入学後に受講生自身が将来教員として「授業者」になることを意識して「初等教育実習指導」や「教育実習」等を受けた経験が、「授業をする際に意識しなければならないこと」という認識形成に大きな影響を与えていることがわかる。

(3) シラバスの段階的な構成についての有効性の考察

以上の分析結果から、「めあてを意識した教育実践が可能となる。」という「初等教育実習指導」の授業のねらいに迫る学びの姿を捉えることができた。このことから、「本時の『めあて』を意識した学習指導を行うこと」の重要性を認識できるようすることを実践的な課題とし、その解決のために3年次後期の「初等教育実習指導」のシラバスを段階的に構成し模擬授業を行ったことは、次の点で評価できると考える。

- ①教員に求められる資質・能力について、児童や保護者の視点から捉えさせることで、「授業ができる」といった学習指導力を身に付けることへの学生の意識の拡張を図ることができた。

②本時の「めあて」がもつ機能やその設定の仕方、本時の「めあて」を意識した授業構成やそれを実現するための教師の指導の在り方などについて具体的に認識することができた。

③3年次後期の「初等教育実習指導」の授業での学びを生かし、4年次の「教育実習」においても、本時の「めあて」の重要性を認識しながら、その実現に向けて授業実践することができた。

よって、本シラバスは、3年次後期の「初等教育実習指導」のシラバスとして有効であり、一つのモデルになると言えるであろう。

5. 本研究のまとめ

(1) 本研究で明らかになったことと課題

今まさに教員に求められる資質・能力の一つである学習指導力の基盤となる力を育成していくことは、教員養成を行う大学の重要な役割である。そのため、受講する学生一人一人に理論的な学びを学校現場での授業実践の場面につなげることができるような学びとなるように教育課程カリキュラムの充実・改善を絶えず図り、例えば、「教科及び教科指導法に関する科目」や教育実習の事前・事後指導に関わる「初等教育実習指導」「初等教育実習」などの授業の中で実践していく必要がある。

筆者は、本学の3年次後期の「初等教育実習指導」の授業のねらいに掲げている「めあてを意識した教育実践が可能となる。」ことを育成すべき学習指導力の一つとして捉え、その実現に向けた授業の在り方を見いだそうとした。その具体的な方策は、受講する学生が「本時の『めあて』を意識した学習指導を行うこと」の重要性を認識できるようするためのシラバスの構成と模擬授業の工夫である。授業実践における受講する学生の学びの姿を通して、次のようなことが明らかになった。

①実際に学校現場では、本時の「めあて」を明確に設定して、どのように学習指導を展開しているのかについて分析・考察させるようにシラバスを段階的に構成することによって、本時の「めあて」がもつ機能を捉え、その実現に向けて意識しながら授業を展開していくことの重要性を認識させることができた。

②模擬授業の実践において、15分程度という時間ではあるが、1単位時間の指導過程である「導入－展開－終末」の一連の流れに沿って学習指導を行わせることによって、本時の「めあて」を意識しながら授業を展開していくことの重要性を体験的に身に付けさせることができた。これらのことは、抽出学生の授業後のリアクションペーパーの記述や、15回の授業終了後に行った「授業を行う際に特に留意すべきこととして認識したこと」についての意識調査の結果における学びの姿から見取ることができた。

課題として挙げられることは、本時の「めあて」を意識しながら授業を展開していくことの重要性を認識することができた要因をさらに検証するために、学生一人一人に対して本シラバスに基づく授業の構成要素となっている教材や模擬授業を含む様々な学習活動、教師の解説等の働きかけなどとの関連から丁寧に聞き取り調査を行う必要があると考える。また、4年次前期に教育実習に取り組んだ12名の学生全員から、段階的に構成したシラバスに基づいて行った3年次後期の「初等教育実習指導」の授業での学びは、教育実習において役に立ったという肯定的な評価を得たが、学生の視点からの課題を捉えることができていないことである。

(2) 今後の授業の在り方についての知見

最後に、本研究での成果を踏まえて、3年次後期の「初等教育実習指導」の授業の在り方についての知見を述べる。なお、ここでの知見は、本学の「初等教育実習指導」のシラバスに示された学生の「行動目標・到達目標」の一つである「めあてを意識した教育実践が可能となる。」ことの実現を図ることを目指したものである。

①受講する学生全員が模擬授業を行う機会を設けるようにする。

授業構成や授業技術などについての理論は大学で学び、その実践について「教育実習」で学ぶという考えから脱却し、大学においても実践力の基礎となる学びの充実を図る必要がある。例えば、本学において、教員を目指す学生の中には、3年次までの科目履修のなかで模擬授業の授業者を一度も経験しないまま「教育実習」を迎える者が一定数いることから、「初等教育実習指導」の授業において受講する学生全員が必ず一度は授業者となって模擬授業を行う機会を設けるようにする。また、このことは、「教育実習」に行くため必修条件の一つとして設定するようにする。

②学習指導の在り方について分析・考察する機会を設けるようにする。

本学において、2年次にインターンシップを通して学校現場での教育活動を参観する学びを設定しているが、受講する学生からの聞き取りでは、授業構成や授業技術の在り方といったことに視点をもって意図的に授業を参観するといった意識を十分に持っていない者が少なからずいるように感じる。そのため、「初等教育実習指導」の授業の一環として、学校現場の授業を実際に参観し、学習指導の在り方について分析・考察する機会を設けるようにする。

③実践した模擬授業を省察する機会を設けるようにする。

①で述べたように、受講する学生が行った模擬授業に対して、その学習指導の在り方について省察する機会を短時間でも設けるようにする。その際、②で述べたような学校現場での授業参観によって得た授業の分析・考察の視点を生かすようにする。模擬授業の省察を行う経験を通して「理論と実践の往還」が行われ、実践的な学習指導力として「めあてを意識した教育実践が可能となる。」と考える。

このような知見を踏まえ、今後も3年次後期の「初等教育実習指導」のシラバスの充実・改善に努め、学生全員が模擬授業に取り組むことを重視しながら学習指導力の育成に資する授業を行うことで、教員養成に貢献していきたい。

〔引用・参考文献〕

- 1) 文部科学省「令和4年度(令和3年度実施)公立学校教員採用選考試験の実施状況について」(2022-09-09)
- 2) 東京都教育委員会「令和3年度東京都公立学校教員採用候補者選考(4年度採用)の結果について」(2021-10-22)
- 3) 中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(2021-01-26)、11頁
- 4) 財務省「歳出改革部会資料文教・科学技術(資料1)」(2020-10-26)、9頁
- 5) 日本経済新聞「小学校教員の不人気深刻、負担増で敬遠、受験倍率最低に、漫画や実技免除でP R。」(2019-08-27)
- 6) 米沢 崇「我が国における教育実習研究の課題と展望」広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第57号(2008)、51-58頁
- 7) 五十嵐 亮、宮内 孝「教育実習及び事前指導を通じた教師効力感、教育実習不安及び自己調整学習方略の変容」南九州大学人間発達研究 第9巻(2019)、25-34頁
- 8) 前掲同
- 9) 中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015-12-21)、9頁
- 10) ベネッセ教育総合研究所が、愛知大学、北海道教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学の4大学間連携によるHATOプロジェクト・教員の魅力プロジェクトからの委託を受けて、2014年12月に愛知県下の小学6年生、中学3年生、高校3年生を対象に調査(約500人から1000人の回答)を実施した「教員のイメージに関する子どもの意識調査」の結果の速報値(2015-06)である。本稿では、小学6年生の調査結果を掲載した。
- 11) 日本PTA全国協議会が、平成28年9月に実施した「教育に関する保護者の意識調査」(2017-09)で、調査対象は小学5年生の保護者2,333人と中学2年生の保護者2,239人である。本稿では、小学5年生の保護者の調査結果を掲載した。
- 12) 東京都教育委員会「東京都公立学校の校長・副校長及び教員としての資質の向上に関する指標」(2017-07)
- 13) 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方」(2006-07-11)
- 14) 文部科学省・教育課程コアカリキュラムのあり方に関する検討会「教育課程コアカリキュラム」(2017-11-17)、7頁

- 15) 日高まり子「音楽科教育法における模擬授業の在り方～協働的授業づくりを通して～」宮崎国際大学教育学部『教育科学論集』第5号(2018-12)、13-27頁
- 16) 文部科学省「小学校学習指導要領解説(平成29年告示)総則編」(2017-07)、77頁
- 17) 東京都教職員研修センター「平成17年度 東京都教職員研修センター紀要 第5号」(2006-03)、75-98頁